陳淳論序説―「朱子学」形成の視点から―

市来　津由彦

一　朱熹思想から「朱子学」の形成へ
二　「朱子学」の形成と陳淳
三　「朱子学」形成の要件
四　「朱子学」テクストの形成と朱熹門人
五　「朱子学」テクストの流布
六　小結

一　朱熹思想から「朱子学」の形成へ

西暦一二〇〇年のその死の時点では偽学とされていた朱熹（一一三〇～一二〇〇）の思想・学術は、南宋の末までには地域の士人層に普及する。その後、その学説は、元後期の科挙再開時に試験問題に採用されることとなり、士大夫思想の主流となっていく。朱熹の思想・学術は、この過程で学ばれるものとしての「朱子学」へと転換していくのである。

邦文の過去の研究に反省をいささか加えるとすると、この学ばれるものとしての「朱子学」と朱熹の思想とを従来未分離のままに検討してきたきらいがあるのではないか、資料のあり方からみた場合いわゆる朱子学とはこの学ばれるものとなった「朱子学」であったのではないか、この「朱子学」に入っていく言説の形成現場と、整理されたこれら資料群との間には距離があるのではないか、といったことがあげられる。朱熹の直接の門人個々には、朱熹の語りかけの、あるいは書簡その他の文章の全体は見えてはいないはずである。また、例えば語録などの記述されたものが整理された現存資料も、朱熹の語りかけをそのまま伝えているわけではないことは容易に想像できる。生前の朱熹がその活動の中で提示しようとした、あるいは表象し得た思想と、この学ばれるものとなった「朱子学」との間には、重なりはありつつも必ずしも一致はせず、そこにずれがあることが予想される。このように考えると、この両者をひとまず分離し、この転換の過程と意味を検討することが、朱熹思想とその展開として元明清にわたる「朱子学」諸問題との全体を考察する上で必須の要件となるであろう。

こうした立場から筆者は、朱熹の生前の活動期も含めて、「朱子学」形成の段階を、

i　一二〇〇年の朱熹の死去まで、
ii　朱熹初伝門人から再伝の世代にその学が引き継がれる一二三〇年前後まで、
iii　科挙文化と絡んで中央学術に進出するとともに、地域の士人へも広がる南宋末まで、
iv　一三一五年、元の科挙への朱子学学説採用まで、

と仮に大きく分けて考察したく考えている。結果だけを見るのではなくして、なぜ「朱子学」が士人層に普及していくのかという形成論的視角から見た場合、段階をこのように分けてみると、この過程のそれぞれに、思想史研究面でも社会史研究面でも、取りあげるべき課題が多く存することが浮かびあがってくる。

筆者はこれまで、この中のiの時期に焦点を合わせて研究を進めてきた。すなわち、朱熹の言説を朱熹とその交遊者・門人らとの共同の産物と見て、彼らの言葉の生成の現場の復原をはかるという視点に立ちつつ、朱熹の書簡と語録資料を分析することにより、朱熹の言葉がその交遊者や一次受容者の心に対して働きかける機能を追跡し、「朱子学」形成の原点としての朱熹とその交渉者の思想交渉の実態を、道学運動の一環として捉えるという研究である〔①〕。このような右のiの段階の検討も引き続きおこなっていく必要はあるが、本稿では、これに続くiiの時期に焦点を移し、陳淳（一一五九～一二二三）を事例としつつ、朱熹の死後の「朱子学」形成に対する朱熹門人、特に高弟といわれる人達の関わりに関して、諸問題の概略を述べることとしたい。

二　「朱子学」の形成と陳淳

まず、検討の素材としての陳淳の思想活動について一瞥したい。ただし、本稿は彼自身に関する新知見を示すことに目的があるのではなく、主として邦文の先行研究に基づきつつ、朱熹没後の朱熹門人の位置を検討するという限定した視点から論及するものであることをお断りしておきたい。本稿の視角からの陳淳に関する筆者なりの理解は別稿の課題としたい。

陳淳は、福建路漳州の人である。若い頃に朱熹の編書と著書を読んで感銘し、一一九〇年と一一九九年との二回朱熹に会面して師事し、朱熹が亡くなったときは四十二歳であった。一二二三年に六十五歳で死去した。後掲の略年表を参照していただきたいが、陳淳の思想展開をひとまず彼の文集資料から考えると、i朱熹の死去時四十二歳＝朱熹師事期、ii朱熹死去後、一二一七年五十九歳科挙のための上京まで＝師の教えの熟成期、iii一二一七年科挙上京後、六十五歳の死去まで＝朱門高弟としての活動期、iv死去後＝認知過程、とわけることができる〔②〕。

朱熹生前の陳淳は、朱熹門人としては朱熹の晩年十年の門人であって、朱熹娘婿の黄榦（一一五二～一二二一）などと比較すると、長老というよりは相対的に一世代若い層に属し、嘱望されてはいたが、特に突出した存在ではなかった。彼は科挙を何回か受けたが合格はできず、中央官、あるいは地方長官といった官に就いた立場の者に比較して言えば、漳州、泉州に活動拠点を置いて塾の教師を仕事とする、地域に埋もれる士人としての人生を送ったといえよう。

そうした彼の名が思想史の中で残ったのは、朱熹の語録の記録をもっとも多く残している一人であることに加え、いわゆる朱子学の重要術語二十五ほどをとりあげ、その各語について数条ずつの説明をつけて朱子学の理論構造を解説しようとした講義をその晩年におこなったことによる。その講義の記録が彼の死後に刊行されたものが、『性理字義（あるいは北溪先生字義詳講。以下、『字義』と略記）』である〔③〕。筆者は、陳淳が特に後者の、そうした講義をおこなったこと、そしてそれが彼の死後にまとめられて残ったこととが、学ばれるものとしての「朱子学」形成過程における朱熹門人の関わりという本稿の課題からみて重要なことと見る。そこで以下、この課題の範囲内で、この講義の特色を瞥見してみよう。

陳淳の名を歴史にとどめたこの『字義』からうかがえる彼の言葉の特色を一言でいえば、「人を人たらしめる形而上的なるものが人に内在し、人はそのことに基礎づけられて生きる」ということを〈説明〉する努力にあるということができる。

いったい、朱熹の学説の理念上の核心は、その学の主観に沿って言えば、「己れを修め人を治める（修己治人）」という言葉（象徴的用例としては朱熹「大学章句序」にみえる）に象徴される考えにある。重要なのは、この前半で「己れを修める」といわれる自己修養が、後半の「人を治める」という他者への倫理的働きかけにつながる論理である。朱熹は、堕落に向かい得るとともに自己の向上にも向かい得る可能性と力を持つ点ですべての人は同じあり方をしている、という人間観を唱えている（「中庸章句序」）。その人間観を踏まえて、自己の修養が深まると、他者が自己修養しているときの悩みの様態が見えてきてその他者への働きかけが可能になり、その他者はそれをヒントにして自力で自己の修養を深め、その連鎖で社会が安定していく、と見るのである〔④〕。そして人のその同型的あり方をさらに支えるものとして、この世界に存在するモノは、すべてそのものの形質の基体としての「気」と、そのものに必ず具わり、そのものの本性、本質を賦与している「形而上」の「理」とから成るという、「理」と「気」とを術語とする世界観哲学ともいうべき思考がある。人は、この世界に存在するものの一部として存在するのであるから、やはり同じ原理によりこの「理」を必ず具えており、もの、またそのあらわれとしての人に内在した「理」を「性（本性）」というとこの学では言う。その本性とは具体的には理想の社会関係を形成していく能力を言い、人からは後天的には左右できないものとしてそれが具わると見るのである。この本性が、自己の向上の修養を導くと朱熹は考える。

陳淳の講義は、このような朱熹思想の前提枠組を用いつつ、社会的な存在である人間の基礎づけともいうべきこの部分を、「理」と「気」とによるモノの存在の哲学からの単なる抽象的説明としてではなく、すでに「性」として形而上の「理」を具えて生きるものとしての人の具体的あり方を、その具わる「理」との関係において多方面から自在に〈説明〉しようとするものであった〔⑤〕。

「朱子学」を講義するにあたり、陳淳をそのような内容の努力に駆り立てた要因としては、先にふれた、二度の師事による朱熹の教えと、その教えに対する朱熹死後の思索とその熟成、またその熟成の結果として出てきた広義の道学運動の中での陸九淵学一派伸張へ

の対抗意識や、さらには黄榦など同門の朱熹門人主流派への対抗意識などをあげることができる。しかし根本的には、生前の朱熹との出会いがその特色を基礎づけたとみられる。すなわち、よく知られていることであるが、第一回目に朱熹に師事したときに、陳淳は、「根源（原）」のところを窮めよと朱熹に言われ、第二回目の師事の時は、抽象的な理念を追うのではなく「下学」せよ、つまり身近で具体的な事柄に即して心を鍛えよ、と言われたという〔⑥〕。

朱熹からすれば、当初は陳淳の思考が、日常の振る舞いに裏づけを与える儒学でないようにみえたために「根源」の追究を提示し、第二回目は、その追究により彼の思考がかえって抽象的な方向に行きすぎているとみえたために、具体的な事柄に即することを説いたとみられる。第二回目の師事の時の指導からすると、第一回目の教えの提示により陳淳は「根源」の追究に彼なりに素直に向かったとみられる。とすると、彼の関心は第二回目の教示によって「根源」志向とは逆の「下学」に向かったと考えられるが、ただその直後に朱熹が死去したために、陳淳に対するその後の朱熹の評語は残らない。しかし『字義』書を見ると、右記のように抽象的哲学に趨るわけではない点で、理念的にはこの「下学」に努めるようであり、しかし肝心な箇所では「理」と「気」の視点を術語として織りまぜて説く点で「根源」を忘れるわけではないようにみえる。『字義』編集者が介在しているという問題はあるが、つまりは「根源」と「下学」は二者択一ではなく、両方向がほどよく折衷されているかのようである。ここに、陳淳において二回の朱熹の教示が年を経て熟成された様子がみられるのではないかと筆者は考える。

三　「朱子学」形成の要件

以上の陳淳の活動を一つの事例として踏まえつつ、朱熹死去後の「朱子学」形成の要件、その中での朱熹の直接の門人、特に高弟達の役割、意義について、以下、考えてみよう。

まず、先に述べた朱熹学説の理念的核心となる「修己治人」論が地域の士人層に学ばれるようになる理由について一般論として考えると、次の二点のことをあげることができる。

第一に、権益・利権に向かう傾向がある「士」という地域秩序を形成する有力者層に対し、やみくもな権益追究を抑制して地域社会の全体秩序の安定をはかるべく、この「修己治人」論が、彼らの心性に言葉を与えるものとして機能するであろうことである〔⑦〕。第二に、この論が、経に準ずる書としての四書の注釈及びその解説書として提示されており、科挙につながる士人文化世界で流通する力を持つことである〔⑧〕。この学が地域の士人層に普及していく大きな要因として、この二点のことがあげられる。陳淳について言えば、彼ははじめ『近思録』『四書集注』などの朱熹の編著に引かれて朱熹への師事を望み、また陳淳の文集にはその晩年に地域の諸問題を論じて漳州、泉州州官に建言していた。右の二点が典型的に現れているのがみてとれよう〔⑨〕。

さて、こうした特質を持つ朱熹の学説が、その特質のゆえに地域の士人に学ばれる「朱子学」となっていく。そうなっていくにあたり、その前提に存する、あるいは存した要件を考えると、さしあた

り以下の三点の事柄をあげることができる。その内実を考えると、朱熹の直接の門人が「朱子学」の形成には不可欠の役割を果たしたことがうかがえる。

第一は、一二〇六年から一二〇八年までの第三次宋金戦争の終息以降、朱熹学術に対する社会的評価が好転したことである。朱熹門人や朱熹同調者の様々な尽力がそこにはある。ただしここに関わる諸問題はむしろ社会史の問題になり、本稿ではふれられない(⑩)。

第二は、朱熹の学説が、彼自身の編集書、著作だけではなく、文集、語録までを含めて朱熹死後に書物テクスト化（読解される対象として固着化）され、流布していくことである。四書の注釈及びその解説という書物の形でその思想を表象しているとはいえ、朱熹の生前は、その学説を支える熱源はやはり生身の朱熹自身にあったといえよう。しかし朱熹の死後は、その学説を支える源は書かれたテクストに移行する。もちろん朱熹の門人、高弟達が、その彼らの門人に語りかけて学説を再生産もする。だが学説の普及面から言えば、講学による人から人への語りかけは限られた範囲にとどまり、その範囲外でこの学を学ぶ者は、朱熹の言葉が記されたものによってその説を学ぶことになる(⑪)。そのような位置にある学説テクストの形成に、朱熹門人は大いに関わる。

第三は、学説の解説的言説の書物が作成され流布していくことである。この学を新たに学ぶ者は、表現された結果としての注釈、朱熹の言葉を単に暗記すればよいというのではない。その学説が拠って立つ前提となる思考の枠組を受け入れ、自らその思考を生きることが求められる。解説的言説がここで機能する。そうした解説書の形成に、朱熹門人の、特に高弟達が大いに関わる。なお、言説という語は、言葉をその流通機能面に即して問題にするときの術語としてここでは用いる。

以下、第二と第三の点についてさらに検討を進めたい。この二件に朱熹門人はどう関わるのか、彼らは「朱子学」形成にどのような意味で不可欠の役割を果たすと考えられるのか。

四　「朱子学」テクストの形成と朱熹門人

まず朱熹資料・学説のテクスト化ということについて言えば、朱熹生前における彼自身の著作の刊行、朱熹の死後における文集の編集・刊行なども、資料のテクスト化ということでは重要である。しかしそこに多くの門人が必ずしも関わるわけではなく、今は検討範囲から省く。これに対し、朱熹死後の朱熹資料のテクスト化に門人が広汎に関与したこととして、朱熹の総合的語録の編纂事業をあげることができる。ここではこのことに焦点を合わせてみてみたい。

朱熹の談話を記録するのは原則的には門人の立場の者である。その意味で語録の編纂は、朱熹門人及びその縁者達の協力なしには実現できない。現存の一二七〇年刊の黎靖徳編『朱子語類』百四十巻は、約百名の門人の個別の朱熹語録を原資料とし、経学上の諸問題別に各条を分類編集した問題部門別語録である。そもそもの朱熹の総合的語録の淵源は、一二一五年黄榦序、李道伝編、池州刊の『朱子語録（池録）』にある。これは朱熹門人三十三人の語録を集めたものである。まもなくして、資料を増補し合計七十人の語録を集め

た上、問題別に分類編集した最初の「語類」が黄士毅により編集され、一二一九年に今の四川で刊行された（『蜀類』）。それ以後、「三つの語録、二つの語類」とよばれる数回の資料収集を経て、黄士毅の構想を踏襲した黎靖徳編『朱子語類』に至る。また、最初の『池録』を前提にしつつ、『朱子語類』とは問題の分類が異なる編集の楊与立編『朱子語略』（一二二〇年刊）、葉士龍編『朱子語録類要』（一二三八年刊）なども作られた(12)。後掲の陳淳略年表、参照。ちなみに陳淳の記録は、『朱子語類』巻頭の「朱子語録姓氏」によると、一二一五年の第一回目の収集においてではなく、第二回目の収集（饒録）において収録されたことになっている。陳栄捷『朱子門人』（台湾学生書局、一九八二年）によると、総六百条で、これは沈僩、黄義剛に続き三番目に多い記録条数である。なお、この第二回目に初めて名がみえる門人にも朱熹生前にたいへん朱熹と親しかった者が多々おり、その人々が第一回目の収集に比べて疎遠な記録者とは必ずしもいえない。「池録」後序を書いた黄榦録が「池録」にないことも不思議である。「蜀類」に「饒録」増補の人がおそらくは多く入っていたであろうが、「池録」と右述の「蜀類」との関係も含めて、この二つの門人群の関係についてはなお考察が必要だが、ここではふれられない。

いったい朱熹の門人達は、朱熹の談話を自身が聞いたときに記録する。その各条は、各自の個別の質問に対する応答である。各人が記録して固着した生まの朱熹像には相当の差異がある。朱熹が死去するまでは各自その個別の記録を抱えたままであり、その差異も朱熹の語りかけの全体像もそれぞれの門人にはみえない。現代のわれわれは、『朱子語類』資料から適宜引用して、これが朱熹の思想だと論じているが、これは語録が整備された後から俯瞰的に資料を見ることができる立場からの言い方である。朱熹の生前に戻って朱熹とその門人との交渉を考察するときには、かつて筆者が、廖徳明と朱熹との交渉の分析などで検証を試みたように、まずは『朱子語類』の各人の記録条を分離し、可能であればその記録条も時系列の先後に並べた上で検討することが求められる。いわば「語類」以前の「語録」（池録）の状態に資料を戻して考える必要があるのである(13)。

朱熹生前はそのように朱熹の談話は個別に保存されていた。そして朱熹が死去し、さらに彼ら門人達も老齢化し始める時点で、次世代への継承という課題から彼らの中に学派意識が高まり、右記のように各個別の記録が総合的語録として集積され、また分類編集されて「語類」化もされることになる。『池録』「後序」において黄榦は、このような総合的語録の形成を評価して、「師が眼前にいるかのようである」という意味のことを言い、人格的感化の視点から師「朱子」の言葉を共有できる喜びを語る。一方、『蜀類』後序において黄士毅は、「朱熹の編集書や著作テクストの補いになる」という意味のことを言い、学説内容検討の視点から朱熹語録を共有できる意義を語る。後者は、要するに「使う」視点からの再編ということであり、科挙文化の深まりに対応する意味を持つものでもある(14)。

こうした師「朱子」の総合的な語録の第一次形成は、朱熹門人達における師の死後の学派意識が創出したものといえる。その効果としては、そのことにより、右述の差異が明確化することがあげられる。と同時にこのことは、朱熹が語ったことの全体が、この学を新

たに学ぶ二次的受容者に共有される条件が形成され始めることでもある。各門人の主観に即しては、「私にはあの問題について先生はああ語られたのに、あの人にはなんと全然違うように言われている」と愕然とすることもあったかと思われるが、当事者の死去とともにそうした思いは時の彼方のものとなり、矛盾した発言を表面上は含んだままで、朱熹の談話の全体が次世代の者に共有されることになるのである。朱熹の直接の門人達は、談話を記録し保存し、資料結集に協力したという意味で、朱熹談話の総合的テクスト化の功労者という特別の位置にあるといえる。しかしその編集、刊行とともに、その総合的な語録は、いろいろな思いを抱いたであろう彼らの手を離れ、朱熹思想が二次的受容者に学ばれるものとしての「朱子学」へと転換するのを進めるものとして機能し始めるのである。

さて、朱熹自身の談話言説資料のこうした書物テクスト化に加えて、「朱子学」の形成と普及の重要な前提要件として考えるべきは、その学説を朱熹以外の者が解説する書物が形成され流布することである。もとより歴代そうした解説はつくられていく。しかし、黄榦のいわゆる『朱子行状』、陳淳の先の『性理字義』などの名をあげれば容易に想像できるように、朱熹の高弟達がこの事柄について果たした役割は殊に大きかった〔⑮〕。加えて朱熹高弟達のこうした解説的言説の作成には、「朱子学」の形成という視点からはやはり特別の位置にある者による作成ということに生ずる特殊な意義が認められると筆者は考える。ただしそのことは従来あまり注目されていない。そこで以下、その意義を述べてみたい。

すなわち、この朱子学を新たに学ぶ第二次受容者がその学説を受容し再生産するときには、先にふれたように、その学説が拠って立つ前提となる思考の枠組―「理と気」「体と用」「天と人」など―を共感的に心の底からまず受け入れることが要請される。そこに必要なのは、その思考の枠組そのものの解説とその枠組から万象を説いた解説である。解説的言説に対する需要が、まずはこのようなところにある。本稿で事例とする陳淳による『字義』の朱熹学説「解説」が、その解説対象を論じる前提思考を再構成して祖師の思考を再確認する作業であるということについては、日本思想史研究者の子安宣邦氏がすでに興味深く指摘している〔⑯〕。創見という意味では、筆者はこのことに何か付け加えようとするものではない。ただし子安氏の論は、日本江戸期の伊藤仁斎『語孟字義』の方法、また荻生徂徠の『弁道』の同時代的意味を考察するという文脈の中で、『語孟字義』が克服しようとした批判対象という視点で陳淳『字義』に論及する。伊藤仁斎の主観に沿って仁斎が批判、否定しようとした方法として言及したものであり、中国における「朱子学」形成の過程の検討という視角からのものではない。その意味でここでは、朱熹説の一次受容者の位置の意義を考察するという視点からこのことにあらためてふれたいと考える。

いったい朱熹の高弟達とは、陸九淵や呂祖謙などの学が朱熹の学と並立していた時期に、その相対の中で朱熹の学を選択し、朱熹の学説を「真理だ」と認めて朱熹その人に傾倒し、同時に朱熹の側がその選択を承認した第一次の朱熹説受容者というべき人々である〔⑰〕。そのような人々が、朱熹の死後に朱熹学説の解説を表出する。ここ

に学説の再生産が始まる。ただし彼らの主観に沿って言えば、その表出は、師の説を単に言説上でなぞるというものではなく、また客観的に師説を世に説明するというのでもなく、朱熹との出会いとその説から受けた感銘を自己確認するためであろうし、加えて、後世に残る解説が一二二〇年前後に形成されていることからすると、それは、自身の朱熹説理解の正統性をみずからの死後に向けて確保するためという意味を持つものであろう。

しかしそうした解説が一度形成されるや、その言葉は彼らの主観を離れ、右述の、朱熹説を新たに学ぶ二次的受容者の解説的言説の需要に対応するものとして機能し始める。

すなわち、陳淳を一例として言えば、それらの解説的言説は、「理と気」「体と用」など、朱熹が経書注釈に用いる前提概念を、朱熹が用いたように用いて朱熹学説を説明する。その学説を新たに学ぶ者からこのことを見ると、朱熹の直接の門人の解説的言説は、朱熹の導きによって「真理を見」ることができた確信から表出されたものという意味でまずは「正しい」ものである。ただしそれは朱熹自身の言葉ではない。朱熹が語るのではない点で言えば、その言説は、彼らこの学の二次的受容者自身とも立場が重なる位置にある。二次的受容者にとって朱熹は直接の関わりを持たない人であるのに対し、一次受容者はその関わりを深く持つ。とともに、その一次受容者が仮に朱熹とほとんど同じ言葉を表出したとしても、それがその一次受容者の心の底から出ていると見なされる場合、その言葉は朱熹のものではなく、朱熹との出会いにより朱説を「真理」と見なした彼自身の深い確信から語られたものと見なし得る。朱熹とは別の人が心の底から朱説を語るというそうした事態は、朱熹と直接の関わりを持たない人々に対し、朱説を「真理」として、「正しい」ものと確信させる可能性を示唆する。こうした意味を持つ解説的言説を表出できるのは、朱熹の特に師に密着していた門人達をおいて他にない。こうした特殊な位置が媒介となり、朱熹説一次受容者による朱説再生産の言説は、朱説の前提となる枠組からその学説を語ることが要請される二次的受容者に対し、その学の言葉の使い方を身につけさせる機能と力を持つこととなる。前節で説いた陳淳による『性理字義』原講義は、まさにこのようなものとして、泉州のある一族の塾で表出されたといえるであろう。

かくして朱熹説の二次的受容者は、朱熹自身による学説言説テクストと、朱熹自身によるのではないがしかし朱熹によって「真理を見」ることができたこの高弟達の解説的言説とに導かれて、朱熹の学説を自身の言葉として語る可能性が開けてくるようになる。二次的受容者に学ばれるものとしての「朱子学」というものが、ここにおいて形成され始めるのである。

五　「朱子学」テクストの流布

しかし、朱熹門人達が媒介となって、朱熹の語録が書記テクストとして固着され、二次受容者の開拓を促す学説解説が形成、表出されたとしても、なおその限りではその活動が一次受容者によるゆえの特殊事情をひきずっている―それが彼らの活動の熱源なのだが

―。学説のさらなる普及は、その個別の特殊事情が二次以下の受容者にとって問題とはならない段階になってこそ、始めて進むであろう。このことを陳淳に即してみてみよう。

すなわち、陳淳は朱熹の語録の編纂に協力もした。また晩年になると朱熹四十代以来の古参門人は死去していき、朱熹死去の時点では中年、若年であった門人も高齢化することにより、彼はなお生き残る朱熹高弟ともみられ、そのことで講演などに招かれるようにもなる(18)。しかしその朱子学解説講義は、陳淳の生前は結局は泉州地域の陳淳周辺の限られた士人に対して示されただけであった。その解説講義が書物化して流布したのは、彼の死後のことである。その解説講義が注目された契機に筆者は注意したい。陳淳及びその一次門人側の事情によるのではなく、いわば科挙文化の成熟が、地域士人として埋もれかけていた陳淳の朱子学解説を発見したといえるのである。

すなわち、いま一六六八年日本江戸刊本『字義』に載せる一二四七年王稼の序を見ると、そこには次のような記述がみえる。

（州の学校である）郡庠で（真徳秀が編集した経学術語解説集の）『西山先生読書記』が刊行された。学ぶ者はわれ先にこの書を読んだ。博士の葉信原氏は、その書が浩瀚なために後進がどう学んでよいかわからない点を心配した。……わたくしはそこで陳淳先生の（コンパクトな解説である）『字義』があることを申し上げた。葉氏は喜んですぐに印刷して学ぶ者に配布した。

はじめ、陳淳先生はわたくし（王稼）の家の塾で講義をされ、術語の概念をしっかり捉えることが大切だと教えてくだされた。……族父の王雋が筆録して書物にした。その後十年して、蘇思恭氏が始めて世に出し、陳宓氏にたのんで序文を書いてもらった。……

（郡庠刊西山読書記成。学者争誦之。摂博士葉君病其条目浩穰、後進亡所従入也。……。稼因以北溪先生字義為告。君喜亟鋟梓以恵同志。初先生講道于稼家塾。誨人以辯析名義為急。……。族父雋筆授而成。後十年、蘇君思恭始出以諗復斎陳公為之叙。…）

ここには、陳淳の解説的言説が世に出るのに三段階の過程があったことが描かれている。

塾の講師という地域の士人としての活動の中で、朱熹学説の第一次受容者としての主観を引きずりつつその解説を表出したのが、その第一段階である。ただしその享受者は、直接に講義に参列した人とその周辺の人にとどまる。

しかしその講義が書物として最初に刊刻された次の段階では、科挙文化の枠組の中でその言葉が機能する契機を得ているのがうかがえる。『四庫全書総目提要』「北溪字義」の項に、「はじめ永嘉の趙氏によって刻された」とあるものが、陳宓（一一七一～一二三〇）が序をつけた初刻の『字義』であろう。これは陳宓死去の一二三〇年以前に刊刻されたとみられる。宣伝文を依頼された陳宓は、朱熹の同時代人のやや先輩で宰相にもなり、朱熹の友人で庇護者でもあった莆田の陳俊卿（一一一三～八六）の子で、福建南部における当時の士大夫文化の名士であり、また陳淳の墓誌銘を書いた人でもある。亡くなった「朱熹高弟」陳淳を士大夫文化の視点で顕彰する意図がこの刊刻にはみてとれる。科挙試験と密接に関わるという当時の士

大夫文化のあり方からすれば、陳宓が刊刻に絡むというこのことが、とりもなおさず『字義』書が科挙文化につながる要素を持たされるということである。ただし上の王稼の文によると、刊刻はされたがその書が地元の州学で使われているようでもなく、「趙氏」が何者かは定めがたいが、その刻本の拡がりはおそらくは陳淳縁者の朱熹門人系統の者に限られ、あまり流布はしなかったようでもある。

そして、その『字義』書が、右のように王稼の提言により再度注目される。これが「朱子学」教学史からみた場合は飛翔ともいえる第三段階である。すなわち、王稼の序にみえる「郡庠」や、「西山読書記」及びその編者で高官に昇進して朱子学の顕彰につとめた真徳秀〔19〕等は、科挙への「朱子学」の食い込みに関わる徴表となる言葉と人物である。つまりこの序文は、『西山先生読書記』の刊行と連動することにより、地域に埋もれかけた『字義』書が、朱熹高弟による講義であることに加え、同時代の経学的知の枠のものであり、科挙文化に充分にのる解説言辞的性格を持つことで注目され、この書が科挙文化と朱熹の学術とが密接に結びついていく道程において見出されたことを物語る。この注目のされ方は、朱熹思想の「朱子学」化が科挙文化の中で促進されていくことを語るものとして、まことに興味深い。なお、付言すれば、明初には、この『字義』書は、各項目ごとに分割されて『性理大全』の関係箇所に組み込まれ、この書物の内容が科挙との関わりで恰好の「朱子学教科書」的言説であるという評価を公的に受ける。すでに立場としては完成した「朱子学」の側が、この一次門人の解説的言説を不可欠のものとして求めるようになっていくのである。

六　小結

以上、陳淳の例のみにとどまるが、名を出しただけにとどまった黄榦撰『朱子行状』などをも含めて言えば〔20〕、朱熹思想が学ばれるものとしての「朱子学」となっていくにあたり、その第一次受容者である朱熹の高弟達は、朱熹の総合的語録編集事業への資料提供や、朱熹の著作テキストの前提となる地平からの解説を提供したことなどを代表として、それぞれ彼らの位置にしか果たせない役割を果たすのである。彼らが学派意識を持たずに何も活動していなければ、「朱子学」の形成はなかったか、違ったものになったか、ずっと遅れることになったであろうという意味で、「朱子学」形成に関わる諸問題を検討する上で彼らが占める位置は大きい。朱熹が生前に活動していた時点で「朱子学」が完成していたのではなく、「朱子学」とその創始者としての師「朱子」は、朱熹門人達の活動によってつくりあげられていったということができるであろう。

注

① 市来『朱熹門人集団形成の研究』創文社、二〇〇二年。朱熹との交渉が親密な朱熹門人のめやすとして、『晦庵先生朱文公文集（以下、『朱集』とも略記）』で朱熹書簡が多数通（十通以上）残る宛人と、『朱子語類（以下、『語類』とも略記）』で多数条（百条以上）記録している記録者が重

なる者を調査すると、廖德明、楊方、黄榦、李閎祖、鄭可学、陳淳（以上、福建）、程端蒙、潘時挙、輔広、滕璘、董銖、周謨、陳文蔚、黄榦、万人傑、呉必大（以上、福建外出身）の十六名を抽出できる（第二篇第三章第一節「五、六十代の朱熹とその門人、交遊者達」）。併せて、『語類』の記録があまり残っていない朱熹の四十代以前からの親密な交渉者については、文集の書簡部分を主な材料とし、これらの人々の朱熹師事の機縁や交渉・師事様態を検討する。

② 主たる資料としては四庫全書所収『北溪大全集』五十巻外集一巻を使用した。乾隆五二年序刊本（東京大学東洋文化研究所蔵）もあり、収録文章は基本的には同じだが編次が異なり、また若干の増補がある。日本における近年の研究としては、楠本正継『宋明時代儒学思想の研究』広池学園出版部、一九六二年、第一編第四章第六節「朱門」陳北溪の項が後述『性理字義詳講（北溪字義）』の立場を詳細に論じ、荒木見悟「陳北溪と楊慈湖」（「哲学」第六輯、一九五六年）が陸九淵学派批判の立場と意味を説き、佐藤隆則「陳淳の学問と思想—朱熹従学以前—」（「大東文化大学漢学会雑誌」二八号、一九八九年）、「陳淳の学問と思想—朱熹従学期—」（同、二九号、一九九〇年）が朱熹への陳淳の特に第一師事期の諸問題を詳細に論じ、小島毅「福建南部の名族と朱子学の普及」（『宋代の知識人—思想・制度・地域社会—』汲古書院、一九九三年、所収）が福建南部から師事した朱熹門人としての意味を論じる。

③ 日本における現代の訳注として、簡潔ながら要点をついたすぐれた「解題」が冠せられた、佐藤仁『朱子学の基本用語—北溪字義訳解—』研文選書、一九九六年、がある。なお本稿末尾の、この『字義』書と科挙との関わりを論じた部分は、佐藤氏のこの翻訳の意義を考える拙稿「陳淳『北溪字義』の日本語翻訳刊行によせて」（「東洋古典学研究」四集、一九九七年）と内容的に一部重なる。部門二十五門系と二十六門系が存する『字義』の版本問題については、井上進「『北溪字義』版本考」（『東方学』第八〇輯、一九九〇年）参照。

④ 『大学』経一章「新民」句に対する『章句』に、「（『大学』本文にいう）「新」とは、その旧いものを革新するという意味である。本文の主旨は、自身にそなわる輝く徳をみずから輝かせたなら、さらに、他者に推し及ぼし、彼自身がそれ以前に染まった汚れを除去するようにせしめる（働きかける）ことを当然していくべきであるということである（新者、革其旧之謂也。言既自明明徳、又当推以及人、使之亦有以去其旧染之汚也。）」という。連鎖については、続く「止於至善」章句、参照。人の同型的あり方については「中庸章句序」に、「蓋嘗論之。心之虚霊知覚、一而已矣。而以為有人心道心之異者、則以其或生於形気之私、或原於性命之正、而所以為知覚者不同。是以或危殆而不安、或微妙而難見。然人莫不有是形、故雖上智不能無人心。亦莫不有是性、故雖下愚不能無道心。二者雑於方寸之間、而不知所以治之、則危者愈危、微者愈微、而天理之公卒無以勝夫人欲之私矣。」とみえる（傍点筆者）。なお、市来による「朱子学」概説として、市来・伊東貴之「朱子学」（『中国思想文化事典』東京大学出版会、二〇〇一年）がある。

⑤ 二十五の項目は、命、性、心、情という順で始まる。『朱子語類』が「理気」から始まるのとは異なる。ただしこれが刊刻編集の際の編次か、陳淳による編次か（おそらく後者であろうが）までは確認できない。

⑥ 第一回目については、『北溪大全集』巻一〇「郡斎録後序」、二回目については、同「竹林精舎録後序」、また両回の具体的問答内容については、

『朱子語類』巻一一七、参照。なお、この時点から晩年への右記「熟成」や、「対抗意識」といった諸問題については、別稿で考察したい。

⑦ 拙著『朱熹門人集団形成の研究』、二〇〇二年、第二篇第二章第二節「朱熹・呂祖謙講学論」、同篇第三章第一節「五、六十代の朱熹とその門人、交遊者達」参照。

⑧ 土田健次郎「社会と思想—宋元思想研究覚書—」(『宋元時代史の基本問題』汲古書院、一九九六年。のち土田氏著『道学の形成』創文社、二〇〇三年、所収)にこの問題の的確な指摘がみえる。

⑨ 注③佐藤書の他、前者の詳細については注②の佐藤隆則論文、後者については同注の小島論文を参照されたい。

⑩ 佐野公治『四書学史の研究』創文社、一九八八年、第二章「宋元代の四書学をめぐる政治思想的状況」は、偽学の禁からこの「好転」への推移、及び一二四一年の朱熹従祀の意味について思想史研究の立場から考察する。

⑪ 小島毅「思想伝達媒体としての書物—朱子学の「文化の歴史学」序説—」(『宋代社会のネットワーク』汲古書院、一九八八年、所収)、小島毅「朱子学展開と印刷文化」(知識人の諸相—中国宋代を基点として—』勉誠出版社、二〇〇一年、所収)が、書物によって学ばれるようになるというこの問題を論じている。

⑫ 友枝龍太郎『朱子の思想形成』春秋社、一九六九年、付録一「朱子語類の成立」(一九六三年初出)、参照。以上の語録類の編者、序文作成者のうち、朱熹の直接の門人は、黄榦(朱熹の婿)、黄士毅(朱熹晩年の門人)、楊与立(一一九三年の進士)である。葉士龍は黄榦の門人である。その『朱子語録類要』が、巻頭に太極、理気論を立てる『朱子語類』系統の構成とは別の項目立てであり、それが朱熹死後の有力門人の主流の考え方であったらしいことについては、友枝書、付録二「朱子語録類要について」(一九六二年初出)、参照。注⑤でふれたように、陳淳『字義』もこの『類要』の捉え方に近い。

⑬ 拙著『朱熹門人集団形成の研究』、第二篇第一章第三節「廖德明—福建朱熹門人従学の一様態—」(一九九一年初出)、同篇第三章第三節「陳文蔚における朱熹学説の受容」(一九九三年初出)、参照。

⑭ 黄榦の言葉の当該部分は、「これを読むと、先生の傍らに侍りその謦咳に接するかのように身がひきしまり、千年を経て同じ場所で会うようであり、皆々が聞いたことを合わせてすべて自身のものとなる。この書物が伝わるのは、少しばかりの補いではないのだ。…(読之、竦然如侍燕間、承謦咳也、歴千年而如会一堂、合衆聞而悉帰一己。是書之伝、豈小補哉。)」というもの。黄士毅の言葉の当該部分は、「諸々の経書については、『(四書)或問』が言及しないところを述べ、『周易本義』の説がまだ確定していないところを調べ、『書経』の説の未完成のところを補うのに充分である。そして『大学章句』で、才能の高い者は抽象的でつかみ所がない所に入り、才能の低い者は功利に流れるといっていることも、その主旨がすべて明白になり、似て非なる説に陥れられなくなる。誠に、少しばかりの益があるというものではないのだ。…(至於群経、則又足以起或問之所未及、校本義之所未定、補書説之所未成。而大学章句所謂高入虚空、卑流功利者、皆灼然知其所指、而不為近似所陥溺矣。誠非小補者。)」というものである。

⑮ さらに李方子の『朱子年譜』をあげるべきであるが、この本自体はすでに滅びた。日本におけるこの書に関する書誌的研究として、山本仁「朱

子学関係文献の再検討―『朱子年譜』の成立と系統について―」（有田和夫・大島晃編『朱子学的思惟』汲古書院、一九九〇年、所収）がある。

⑯ 子安宣邦『「事件」としての徂徠学』青土社、一九九〇年、第八章「命名と制作―『弁道』という作業」、同氏『江戸思想史講義』岩波書店、一九九八年、第三章「二つの『字義』・儒学の再構成と脱構築―『語孟字義』講義の上―」（一九九六年初出）、参照。

⑰ 拙著『朱熹門人集団形成の研究』、第二篇第三章第五節「朱熹晩年の朱門における正統意識の萌芽―呂祖倹と朱熹・朱門の講学を事例として―」（二〇〇一年初出）において、朱熹のこの「承認」の事例として、呉必大、万人傑と朱熹および朱門間の書簡による講学を論じた。

⑱ 一二一七年に科挙のために上京し、その帰途、厳州で知事鄭之悌に頼まれて二ヶ月滞在して講義し（いわゆる厳陵講義）、陸九淵学批判をしたことは有名である。

⑲ 真徳秀（一一七八～一二三五）は、陳淳のまだ在世中に第一回目の泉州知事となっており（一二一六～一九）、その人脈は陳宓をはじめ、陳淳人脈と重なる。ただし真徳秀と陳淳との間に直接の交渉があったという資料は不詳である。また同時期、注⑮の李方子も観察推官として泉州に赴任していた。陳淳をめぐる漳州、泉州ネットワークについては、別稿で考えたい。

⑳ 「行状」は、官人としての生涯を記述した後に、黄榦は朱熹の学説とその体現者としての朱熹を簡潔に概論する。日本における現代の訳注として、佐藤仁『朱子行状』明徳出版社、一九六九年、がある。その「解題」は、黄榦の「体」「用」の双方を尊重する思想を簡潔に解説する。また朱熹死後の地方官としての黄榦の官僚人生については、近藤一成「宋代の士大夫と社会―黄榦における礼の世界と判語の世界―」（『宋元時代史の基本問題』汲古書院、一九九六年、所収）が詳しい。なお、陳淳と黄榦とは、その晩年、陳淳が黄榦をかなり意識するのに対し、黄榦は陳淳をさほどには意識しないという関係にあったようである（注②既出の小島毅「福建南部の名族と朱子学の普及」）。

本稿は、平成一四～一七年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）「南宋後期における「朱子学」形成の基礎的研究」（代表・個人）、及び平成一三～一六年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）「宋代士大夫の相互性と日常空間に関する思想文化学的研究」（分担）による研究成果の一部である。

陳淳　略年表（附・黄榦）

A.D.		大事記	朱　熹		陳　　淳			黄　榦
				歳			歳	
1152							1	生　福州閩県人
1159					生　漳州安溪人			
1163	孝宗			1				1168年、父黄瑀死
1176							25	朱熹師事
1180				22	近思録を読む	第		1179年、長兄黄杲死
1182							31	朱熹三女と結婚
1190	光宗		知潭州・侍講	32	11-4.第一次師事	I	39	
					朱「根原来処」提示			
1191		慶元偽学禁			・書簡=陳集34通	期		
					朱集6通			
1199				41	11-1.第二次師事		48	
					朱「下学」提示			
1200	寧宗		3.死去71歳	42	10.「朱先生叙述」		49	次兄黄東の死
1203			(朱門)				52	監嘉興府崇徳県石門酒庫
1206		5.宋金開戦					55	湖北安撫使激賞酒庫
								(呉獵の推薦)
1207		韓侂胄死	偽学の禁解除			第		
1208		5.宋金講和		50	科挙上京		57	知臨川県（趙希懌、高
						II		商老らの推薦）一期
1211				53	科挙上京			
1212						期	61	知新淦県
								江西道学ネットワーク
1213								安豊軍通判
1214							63	権太平州、権発遣漢陽
								軍提舉義勇民兵
1215			語録池録 黄榦序				64	祠禄官。考亭に行く。
1217		金、侵入		59	科挙上京		66	権発遣安慶府事
					8-10.厳州滞在。講義。			
					浙東陸学批判			
					10.莆田講学	第		
1218				60	守泉州安溪県簿待次		67	権発遣和州
					この頃、黄榦へ書簡	III		
					(1216-19 真徳秀知泉州、			福州に帰る
					→泉州名士ネットワーク)	期		主管武夷山冲佑観
1219			語類蜀類 黄士毅	61	この頃、泉州講学		68	
1220					『字義』講義		69	儀礼経伝通解喪礼
1221			朱子語略 楊与立		泉州講学ネットワーク		70	文公行状。死去。
1223				65	死去			
1224	理宗				『字義』刊刻	（		
1228		ﾁﾝｷﾞｽ死			・陳宓序趙氏刻本1230前	第		
1234		金亡ぶ	38頃			IV		
1241		ｵｺﾞﾀｲ死	語録類要 葉士龍			期		
		朱熹従祀			・葉信原刻本1247	）		

附記

本稿は、二〇〇三年三月二七～三〇日にニューヨークで開かれた米国のアジア研究協会（Association for Asian Studies　略称AAS）の年次学会大会で発表（印刷冊子提出・配布）した翻訳英文論文の元の日本語原稿を補訂、改稿したものである。

学会発表はパネル形式でおこなわれた。プログラムによると、超地域（及び図書・教育）、東南アジア、南アジア、コリア、日本、中国と中央アジア、に分類されて二百十五のパネルが事前の審査を経て参加した。筆者は、

「Rethinking the Daoxue Movement in the Southern Song: Its Impact on Local Elites（南宋道学運動再考―その地域士人への衝撃―）」

と題するパネルに加わり発表した。宋代社会史、思想史研究者であるドイツ人の司会、日本人二名及び米国人一名の発表者、中国及び米国人各一名の討論者によって組まれた学際的国際共同パネルであった。各発表論文題目及び司会、討論者は左記の通り。

司会　Angela Schottenhammer, *University of Munich*（ドイツ）

発表1・**Disciples Make the Master: Zhu Xi' s Students Interpret Zhu**（弟子が師「朱子」をつくる―朱熹門人の朱熹受容―）

Tsuyuhiko Ichiki, *Hiroshima University*

発表2・**Local Realities and Later Representations: Ningbo Scholars and Daoxue**（地域リアリティーと後世の表象―寧波の学者と道学―）

Toshihiro Hayasaka（早坂俊廣）, *Shinshu University*

発表3・**Political Persuasion and Local Shirines**

Ellen Neskar, *Sarah Lawrence College*（米国）

討論者　Jun He（何俊）, *Zhejiang University*（浙江大学・中国）

Peter K. Bol, *Harvard University*（米国）

通訳　Mayumi Yoshida（吉田真弓。カリフォルニア大）

パネル参加申込みの際に提出するパネル主旨は、市来が作成した原案を、ピーター・ボル教授が米国向けにアピールするように改稿して成った。内容は大要、討論者も含めた発表者が日米中の国際共同パネルであり、研究者として育った各国学界の異なる視点を生かしつつ「道学運動」問題について新たな理解の地平をめざす、というものである。発表は、討論者のコメントも含めて言えば、予想通り視点の相違が浮かびあがったような所もあって興味深いものであった。ただしその相違点の意味は今後の交流において深めていく問題と思われるので、ここではふれない。

今回の学会大会参加の趣旨は、主に中国史学分野で八十年代前半までは米国の研究者が日本の中国学研究を身につけるべく留学していたが、改革開放政策を採るようになった中国との直接交流が盛んになるにつれ日本の研究情報が受信されない状勢になり、これに対し、米国に出向いて直接に成果を発信して日本の新進の研究をみてもらうというものである。筆者も参加している日本の「宋代史研究会」の有志の中にこの動きがあり、今回のAAS大会でももう一件、中国社会史分野で、

「Local Cultures across Time, Space, and Class: New Japanese and American Approaches to the Study of Song History」という国際共同パネルを、伊原弘氏、須江隆氏と米国の研究者が組んで発表した（米英国のイラク攻撃が始まり、勤務先から渡航自粛の厳しい要請が出た須江氏の発表は、司会のベティーヌ・バージ教授による代読となった）。以上の二つのパネル参加の実現により、学会発表という場においては米国の研究者と今後とも協力してやっていけることが確かめられたと考える。

なお、こうした日本側の呼びかけに応じて、パネルの組織化に尽力し助言くださった、ピーター・ボル教授、ベティーヌ・バージ教授、吉田真弓氏、そして論文の英文翻訳に力を尽くしてくださったペネロープ・アン・ハーバート氏、翻訳仲介の労を取ってくださった財団法人東方学会河口英雄氏に、ここで深甚の謝意を表したい。

さて、本稿は、この附記冒頭に述べたように、以上のような場で発表した翻訳英文論文の日本語原稿を改編したものである。元の日文論文計画中は本稿に近い構成を考えていたのだが、英文論文は米国での発表でもあり、その論文に基づいて口頭発表することを考え、事例としての陳淳に関する記述は後にまとめ、事例から出てくる考察部分を前半に集中した構成とした。本稿では当初計画の構成に戻し、また元原稿では説明不足であった表現を補訂した。朱熹の門人、高弟が「朱子学」形成に果たした役割の客観的検討が必要である、という根本主旨は変わらない。ただし科研費研究の研究課題「南宋後期における「朱子学」形成の基礎的研究」の序説という、今後へ向けての方向を強化した記述とした。米国向けと日本向けとに記述が交錯しており、本誌（東洋古典学研究）の読者にはいわずもがなの周知の事項も多々混じっているが、論の展開上、削除は難しく、読者のご寛恕をお願いしたい。